

論 文

唱歌・童謡に関する一考察と教材研究

Study Material Research Regarding Children's Songs

武 藤 憲 夫

MUTOH Norio

1. はじめに

私たちは、人類が長い歴史の中で作り上げてきた音楽を表現することで、心に潤いや慰めを得たり、仲間と喜びを共有し合ったりしてきた。音楽は人間の心の成長や人間の様々な行動と密接につながりを持っている。

音楽は歌唱、器楽、鑑賞などで楽しむことができるが、音楽の中で私たちの最も身近にあるのは歌うことである。声を出すということは、相手に何かを伝えようとする手段として、また、エネルギーを発散させるために人間にとって必要なことである。人間はこのような欲求を土台としながら、意味のある言葉を音にかえて表現し歌を作った。

歌は人間が備え持っている声によって表現される音楽で、最も端的に人間の感情を表出することが可能な手段の一つである。

子どもたちは音楽だけによって成長するのでないのは勿論のことであるが、子どもにとって音楽と触れる体験は、成長・発達や生き方に影響を与え、感性や表現力を豊かに涵養する上で大切なことである。そのためには、子どもたちによりよい音楽環境を創出する工夫が必要となる。

子どもに歌を教えるということは文化の継承でもある。大人が素晴らしさや親しみを感じている歌を、次の世代へ伝えるのであるから、長い間よい歌だとして歌われてきている曲を伝えることが大切である。現代の子どもたちの生活の中にはマスメディアやCDなどの影響で、CMソングやアニメソング、そして、ポップスなどの音楽が身の回りにあふれている。曲の多くはリズム感がありテンポの速いものである。楽しくて明るく元気があって、それなりのよさはあると思う。しかし、流行に沿った音楽ではあるが、長く聴き、また、歌い継がれる曲が少ないのはなぜか。

若い世代に人気があったロック・バンド、X-JAPANのメンバーだったYOSHIKIは、「音楽には、国境もジャンルも、時間の流れも、言葉の壁もないんです。素晴らしいメ

ロディーは国籍や年齢に関係なく、誰の心でも打てるはずだから」と言っている。

この言葉の通り、音楽で長い間残っている曲のほとんどは、美しいメロディーで作られた曲だといえよう。

我国において、唱歌・童謡は多くの人々の心に潤いと安らぎを与えながら親しまれ、数多くの曲が長い歴史をかけて歌い継がれてきている。勿論、戦後の「新しい子どもの歌」「現代子どもの歌」の中にも、後世まで歌い継がれるだろうと思われる名曲は数多い。ただ確実にいえることは、時代を超えて歌い継がれる曲によってこそ、音楽文化が形成されていくということである。

2. 唱歌と童謡

唱歌は、明治時代から大正、昭和にかけて小・中学校の音楽の授業で教えるために作られた歌である。

最初に唱歌が作られたのは明治10年代であるが、当時はスコットランド民謡の「螢の光」や、哲学者ジャン・ジャック・ルソーが作曲した曲による「むすんでひらいて」の他、「ちょうちょう」「仰げば尊し」など、西洋音楽のメロディーに日本語の歌詞をつけたものが多かった。

明治20年代以降になると日本人の作曲による唱歌が増え、その中には現在も歌い継がれている数多くの名曲がある。このようにして唱歌はたくさん作られているが、学校で教えることを目的としていたので、曲によっては歌としての芸術性がおろそかにされ、道徳の教科書をそのままの歌詞にするというような状況も出てきた。

このような唱歌に対して、当時の文学者の間でもっと子どもたちに親しみやすい口語体の詞で、芸術的にも優れた新しい子どものための歌を作ろうという運動が盛り上がってきた。

大正時代の中頃に始まったこの運動は、全国の作家や音楽家を巻き込んで数多くの新しい子どもの歌としての童謡が発表され、昭和初期から戦後に至るまでの約40年、長い歳月にわたる文化運動となった。

3. 唱歌の歴史と背景

明治のはじめ、音楽は唱歌と呼ばれ、学校の教科として登場したのは明治5年のことである。しかし、学制の発布によって、音楽(唱歌)は「当分之ヲ欠ク」と記され、実施には至らなかった。

明治12年、文部省に音楽取調掛(現東京芸術大学音楽学部)が創設され、「ちょうちょう」「螢の光」「アニー・ローリー」、ウェルナーの「野ばら」などの外国曲が紹介された。音楽取調掛は唱歌教育の実施にあたって、日本の新しい音楽を創出することをねらいとして多くの事業を展開した。

その一つに唱歌教科書の編纂発行がある。明治14年から17年にかけて「むすんでひら

いて」「ちょうちょう」「螢の光」などが載った教科書「小學唱歌集」や、「ぶんぶんぶん」「キラキラ星」などが載った「幼稚園唱歌集」が発行され、唱歌教育の実施に向けて本格的な活動が始まった。

明治30年代に「湊」「夏が来ぬ」「花」などが載った「新選国民唱歌」が発行されている。また、児童向けとしては、「水遊び」「鳩ぽっぽ」「お正月」などが載った「幼稚園唱歌」が刊行されている。

明治36年には教科書の国定化が行われ、明治43年に唱歌教科書の模範を作る目的で、「ツキ」「こうま」「ふじの山」「春が来た」「虫のこえ」「われは海の子」など27曲を収めた「尋常小學讀本唱歌」が編纂されている。

続いて明治44年から大正3年にかけて、小学校の学年別に「尋常小學唱歌」が発行され、文部省は編纂委員会を設け、日本人の作詞・作曲による「文部省唱歌」の原型ができあがった。

その後、大正時代の童謡の先駆けともなったといわれる「幼年唱歌」が明治45年に発行されている。

文部省唱歌は、明治から昭和にかけて文部省が編纂した尋常小学校、高等小学校及び国民学校の唱歌、芸能科の教科書に掲載された曲である。具体的には、明治43年の「尋常小學讀本唱歌」から、昭和19年の「高等科音楽」までの教科書に掲載された曲のことである。

明治期に西洋より近代音楽が紹介されると、学校教育用に唱歌と呼ばれる多くの曲が作られたが、これらは徳育・情操教育を目的に、多くは日本の風景・風習などを歌っている。「紅葉」「雪」「汽車」「村祭」「春の小川」「村の鍛冶屋」「鯉のぼり」「海」「朧月夜」「故郷」など、現代まで歌い継がれている歌を数多く見つけることができる。これらの曲の多くは、今日まで歌の教材として取り上げられ、多くの人の愛唱歌として歌い継がれている。

4. 童謡の歴史と背景

大正時代は明治の末から発刊された「尋常小學唱歌」と、学校教育用に創作された唱歌を否定して誕生した「童謡」が大きな柱となった時代であった。大正の半ば、童心を大切にする芸術教育思想を提唱した鈴木三重吉や、彼に賛同した北原白秋が中心となり、それまでの児童文学に対する批判から童謡・童話運動を起こした。

大正7年、鈴木三重吉は児童用の童謡・童話雑誌「赤い鳥」を創刊した。この「赤い鳥」に西條八十の童謡詩が掲載され、翌年、成田為三作曲による「かなりや」が童謡の先駆けとなった。真に子どものための歌、子どもの心を歌った歌、子どもが自然に口ずさめる歌を作ろうという鈴木三重吉の考えは多くの同調者を集め、童謡普及運動は一大潮流となった。これが歌に夢を抱いていた子どもの心を捉え、子どもの文化の新たな創造となった。

「赤い鳥」の後、斎藤佐次郎の「金の船」など多くの児童文学雑誌が出版され、次々に童謡を生み出した。中でも「赤い鳥」の北原白秋と山田耕筰、「金の船」の野口雨情と本居長世などが多くの名曲を手がけ、童謡の黄金時代を築いた。北原白秋、野口雨情は、「赤い鳥」から「童話」へ移った西條八十と共に童謡三大作詞家と呼ばれた。

野口雨情は、童謡によって子どもを教育することが必要だと説き、童謡が子どもの発達にかかわる重要性を強調している。

その後、昭和期においては昭和16年の国民学校令の公布により、これまで唱歌と呼ばれていた小学校の教科名が「芸能科音楽」となり、「音楽」の名称が教科名として使われることになった。

5. 唱歌・童謡に関する一考察と教材研究

私は県内各地で唱歌・童謡の講演を行っている。受講生は50～80歳代がほとんどであるが、前奏を弾けばほぼ全員の人が印刷してある歌詞を見ないで、気持ちよさそうに、そして楽しそうに歌っていただける。

しかし、残念ながら30歳以前の年代の多くはそのような状況でなくなってきており、「曲を知らない」や「詞の意味が理解できない」という人が多くなっている。

2年前に富山市こども福祉課の主催による若い保育者を中心とした幼稚園・保育所合同研究会で、唱歌・童謡をテーマにした講演を行ったが、以下は終了後のアンケートの一部である。

「現代の流行の歌では感じられない安心感があり、曲のできた背景を知ることにより親しみを持つことができた。唱歌・童謡の持つ癒しとパワーを、子どもたちに伝承していかなければならないと思った」。

「今日歌った唱歌・童謡は日本人の心を伝える大切な歌であり、心豊かになるメロディー、四季や行事、日本の自然を素直に言葉にした素晴らしい財産だと改めて感じた。子どもたちと共に機会を捉え歌っていきたいと思った」。

「とても心身が癒され、唱歌・童謡を歌うことで気持ちがよく、楽しくなりました。幼い頃からよく親子で口ずさんでいたような曲を今回改めて歌い、メロディーの美しさや親しみやすさを実感しました。今日の気持ちを大切に、これから子どもたちにこの美しい伝統的な名曲の数々を少しでも多く伝えていきたいと思いました」。

「多くの唱歌・童謡を歌いとても楽しかった。一曲ごとの背景を知ることですぐの感情がわき出て、唱歌・童謡は子どもの感受性を高め、優しい心、慈しむ心を育てるために、音楽がとてもよい影響を与えることを知ることができた」。

「唱歌・童謡を歌い、とても心地よい時間を過ごすことができました。改めて歌詞を読めると、親の子を思う優しさや、日本の美しい情景をしみじみと感ずることができ、ぜひこれからの子どもたちにも大切にしていってもらえるように、私たちが伝えて

いかなければならないと思いました」。

アンケートにはこのようなことが記されていた。現在歌い継がれている唱歌・童謡の多くは心に残る美しいメロディーを持っており、現代の子どもにも充分感動を与えられるはずである。そして、動物や虫などの生き物、山や川を歌った曲が多く、今ではほとんど見ることでできなくなった日本の原風景が表現されている。歌詞に込められた文化や伝統、日本を愛する心を後世に伝えていくことは大切なことである。

また、唱歌・童謡の中には日本の四季の特徴を表現した季節の歌が多いが、子どもたちに日本の四季の美しさを伝えていく一つの方法として、このような季節の歌を歌うことにより、その季節を心に感じとり、イメージを膨らませてほしいと思う。

唱歌・童謡に親しむことによって、子どもは日本の美しい自然や四季の移り変わりに感動する心、そして、文化や伝統などを知ることができ、豊かな知識や柔らかな感性を育むことができるのである。

唱歌・童謡を子どもたちに指導する場合、指導者は歌詞や曲の音楽的特徴及び生まれた背景などを十分に理解すること、つまり教材を十分に研究することで、子どもたちにその曲の魅力を感じさせることが可能となり、子どもたちは歌う喜びを味わいながら表現することができる。そして、そのことが豊かな感性を育てることの原動力となる。

また、曲に対して子どもたちの共感が生じたときは最も曲想表現に結びつけられるようになる。だから、一つの曲を十分に歌い込むことで、曲に対する共感を呼び起こし、歌詞や曲の音楽的特徴や生まれた背景などを説明して、曲に対するイメージを膨らませ、子ども自身に表現したいという欲求を持たせることが大切になってくる。つまり、指導者はリズム、メロディー、歌詞などの特徴の表現に工夫をすることが大切なことになる。このようなことから、前述した通り、唱歌・童謡を指導する場合は、それぞれの曲が有している歌詞や曲の音楽的特徴及び生まれた背景を理解することは重要なこととなる。

それでは、唱歌・童謡を季節ごとに5曲ずつ選曲し、その音楽的な特徴や背景などについて触れることにする。

《春の唱歌・童謡》

花

明治33年に発表された唱歌である。滝廉太郎が作曲したこの曲は、日本人の作曲した最初のピアノ伴奏付き唱歌の一つであり、日本初の芸術歌曲といえる。

有名な黒田堤の桜は、八代将軍・徳川吉宗が1717年(享保2年)に植え替えさせたのが初めとされており、幕末には江戸随一の桜の名所となった。現在は千本を超える桜が昔と変わりなく私たちを楽しませてくれている。

この年に「きんたろう」「鉄道唱歌」などが作られている。翌34年には「箱根八里」「うさぎとかめ」「お正月」などが作られた。

春が来た

明治43年に発表された唱歌である。作詞家・高野辰之と作曲家・岡野貞一のコンビによる唱歌は、この曲の他に、「紅葉」(明治44年)、「春の小川」(大正元年)、「朧月夜」(大正3年)、「故郷」(大正3年)など、日本の心の故郷を歌う名曲として今も多くの人に愛唱されている。

作詞者である高野辰之の故郷、長野県の北信濃は冬が大変厳しく、春の訪れが待ち遠しかったときのうれしい喜びが伝わってくる曲である。

同じ作者による「春の小川」は春の風景を想像させる描写の曲なのに対し、この曲は春が来た喜びを表現している。

この年に「ふじの山」「つき」「われは海の子」などが作られ、翌44年には「かたつむり」「雪」などが作られている。明治45年には、「茶摘」「村祭」「汽車」などが作られ、明治の幕が閉じられた。

春の小川

大正元年に作詞・高野辰之、作曲・岡野貞一のコンビにより発表された唱歌である。東京都渋谷区に流れていた川と、その付近の風景をもとに作られている。滑らかなメロディーで、春の情景を爽やかに歌っている。

現在使われている歌詞は、昭和17年に発表されたとき、「さらさら流る→さらさらいくよ」「においめでたく→すがたやさしく」「ささやくごとく→ささやきながら」「ひなたにいでて→ひなたでおよぎ」など、林柳波が文語体から口語体に改めた。

この年には他に「村の鍛冶屋」も作られており、翌2年には「冬景色」「海」などが作られている。

朧月夜

大正3年に発表された曲である。作詞者の高野辰之は故郷・長野県長峰地区を彩る葉の花畑を想像して作詞し、作曲者の岡野貞一も故郷・鳥取の葉の花を見た思い出を曲想に反映したようである。

おぼろに風景がかすむ日本の春の情景を見事に表現した詞とメロディーの融合が美しく、穏やかな曲想による3拍子の名曲である。

2番の「里曲」は里の辺り、「火影」は家々の明かりのことである。

春よ来い

大正12年に発表された童謡である。作詞した相馬御風は「早稲田大学校歌」や「カチューシャの唄」などで知られ、作曲した弘田龍太郎は「叱られて」「雀の学校」「靴が鳴る」などを作っている。

作曲されたのは関東大震災の年である。弘田龍太郎はこの曲に、歌を歌うことで人

の心に太陽を取り戻そうという願いを込めているが、詞は御風の愛娘がヨチヨチと歩き始めた姿をモデルにして作られている。若くして名をはせた御風は33歳の時に故郷・新潟県糸魚川市に戻り、良寛の研究者として貢献した。雪深く遅い越後の春を待ちわびる子どもたちの心を表した詞は、一切の欲を捨てて子どもたちとともに過ごした良寛さんのように、作詞者の子どもに対する愛情が伝わってくる。

この年には「どこかで春が」も作られている。

《夏の唱歌・童謡》

夏は来ぬ

この曲が発表されたのは明治33年であるが、38年の「新編教育唱歌集」に掲載された。今も明治期を代表する唱歌の一つに数える人は多い。

第1回文化勲章(昭和12年)受賞者である国文学者・佐佐木信綱が、古歌から採った歌詞がこの曲に格調を与えている。いまだに新鮮な気分で愛唱されているのは、季節の移り変わりに敏感な日本人の感性の表れであろう。

作曲者の小山作之助は、後に東京音楽学校(現東京芸術大学)の教授として教鞭をとっているが、信綱の父弘綱の門弟でもあった。

われは海の子

明治43年に発表された唱歌である。明治時代の唱歌中最も有名な曲の一つであるが、この曲は長い間、作詞・作曲者が不詳であった。しかし平成元年、童謡作家の宮原晃一郎の長女が、父である宮原晃一郎が明治41年の文部省新体詩懸賞募集に当選した通知と賞金を記載した書類を保管していたことが分かり、作詞者は宮原晃一郎と認定された。

海辺の貧困な境遇の中でも負けることなく、立派で頼もしい大人に成長していくことを願った歌である。

海

大正2年に発表された作詞・作曲者は不詳の文部省唱歌である。「松原遠く 消ゆるところ 白帆の影は浮ぶ」と格調高い歌詞で書かれている。締め括りの部分のメロディーとリズムで海の壮大さを表現している。

「しるき」ははっきり、「いさご」は砂のこと。平成元年にNHKが発表した「愛唱歌ベスト100」では19位にランクされた。

「うみはひろいな 大きいな」で有名な「うみ」は、作詞・林柳波、作曲・井上武士によるもので、昭和16年、「ウタノホン」に掲載された文部省唱歌である。

しゃぼん玉

この歌は大正9年に発表されている。作詞・野口雨情と作曲・中山晋平による代表作のひとつである。野口雨情は北原白秋、西條八十と並んで「童謡三大作詞家」の一人といわれている。愛唱されてきた歌はとて多く、作曲家・本居長世と「十五夜お月さん」(大正9年)、「七つの子」(大正10年)、「青い目の人形」(大正10年)、「赤い靴」(大正11年)などの名曲を残した。また、作曲家・中山晋平とは「しゃぼん玉」の他、「黄金虫」(大正11年)、「兎のダンス」(大正13年)、「証城寺の狸囃子」(大正13年)、「あの町この町」(大正14年)、「雨降りお月」(大正14年)の他、「波浮の港」、「船頭小唄」など、童謡と流行歌の両方で時代を担う作詞家となった。

この曲は、作詞者・野口雨情が演奏旅行先で、2歳になった愛児が病死したという報に接し、そのときの愛児に対する気持ちを、「しゃぼん玉消えた 飛ばずに消えた 生まれてすぐに こわれて消えた」とこの歌に込めたという説と、大正期にあった間引きによる水子の命に対する愛おしさをこの歌にしたという説がある。

たなばたさま

昭和16年の文部省国定教科書「ウタノホン」に掲載された。作曲者の下総皖一は教科書に多くの曲を残している。牽牛と織姫の星座をめぐる中国の伝説が江戸時代に日本に伝えられ、たなばたが定着した。この曲を歌うと、幼い頃の七夕まつりの日に折り紙などで笹飾りをして願い事を書いたことを懐かしく思い出すであろう。現在も幼稚園・保育所・小学校では、この時期にがすがしい歌声が聞こえてくるが、いつまでも後世に残るであろう美しいメロディーの名曲である。

《秋の唱歌・童謡》

紅葉

明治44年に作られた秋を代表する唱歌である。紅葉を美しく写實的に描写した歌詞と、歌いやすく語りかけるようなメロディーで親しまれている。信越本線・碓氷峠の駅付近から眺めた紅葉の美しさを詠んだといわれている。

故郷

大正3年の「尋常小学唱歌」に発表された唱歌である。日本の四季を美しい言葉で表現した歌詞と、3拍子の心地よいリズムによるこの歌は、多くの日本人の心を捉え、日本の歌を代表する愛唱歌として親しまれている。これほど多くの人に愛されている曲はなく、海外に在住する日本人の人気No.1の曲となっている。

夕焼け小焼け

詞が作られたのは大正8年で、作曲されたのは大正12年である。この詞は東京の日

暮里で小学校教師をしていた中村雨紅が、夏休みに八王子駅から南多摩郡へ帰る道すがら、山寺から流れてくる鐘の音を聞きながら、夕暮れの美しい景色に出会い、そのときの感銘をうたったものといわれている。

赤とんぼ

平成元年にNHKが募集した「日本の歌 ふるさとの歌」には65万通を越す応募があり、5千曲以上の歌の中で「赤とんぼ」は第1位に選ばれているが、日本童謡の会が平成15年に発表した「好きな童謡アンケート調査」でも圧倒的人気で第1位となっている。

三木露風が大正13年に作詞し、山田耕筰が昭和2年に作曲した。日本の郷愁を誘う美しい歌として、多くの人に愛唱されている名曲である。

里の秋

斎藤信夫・作のこの歌詞は戦時中に作られているが、童謡として世に発表されたのは終戦直後の昭和20年である。NHKから復員兵を迎える歌を作曲してほしいと依頼された海沼実は、かつて戦時中に斎藤信夫から送られてきていた詩を思い出し、戦争色の強い三番の歌詞「ああ 父さんのご武運を 今日も一人で祈ります」と四番の「大きくなったら 兵隊さんだよ 必ずお国を護ります」という歌詞を書き直してもらい、兵隊さんを迎える歌詞とした。ラジオ番組「外地引き揚げ同胞激励の午後」で童謡歌手の川田正子が歌って大変な反響を呼び、その後も「復員だより」の番組で流し続けられ、今日まで名作として歌い継がれている。作曲の海沼実は「あの子はだあれ」や「みかんの花咲く丘」を作っている。

《 冬の唱歌・童謡 》

螢の光

明治14年に唱歌のために選曲された、「Auld Lang Syne(久しき昔)」という原題のスコットランド民謡であるが、「小学唱歌集」に「螢」という題名で掲載された。作詞者は不詳である。初期の唱歌の多くは外国の曲を多く使っているが、その歌詞は訳詞ではなく、日本の教育を歌詞にはめ込んだ曲が主流であった。この曲はスコットランド人のバーンズが、親しい友人との再会の歌として作詞した曲であるが、現在では世界中で別れの歌として使われている。

「螢の光」は日本人が作曲した歌ではないが、親しみやすいメロディーと、学校におけるこの曲の教育により、今では多くの日本人の心に定着している。

お正月

明治34年、作詞家・東くめと作曲家・滝廉太郎が中心となって編集した「幼稚園唱

歌」に発表した。掲載されている20曲はどれも作詞・作曲が素朴であり、子どもにわかりやすい歌で編集されている。

日本人のほとんどは、正月が近づいた年暮れになると、自然に口ずさむ愛唱歌であろう。

雪

明治44年に作られた唱歌である。雪の景観を表現したこの曲は、歯切れのいい軽快な付点音符のリズムで歌いやすいこともあり、雪が降り出すと思わず口ずさみたくなる愛唱歌となっている。歌詞の「雪やこんこ」は、雪の多い地方で歌われていたわらべ歌の節が生かされているが、明治の曲とは思えない新鮮さがある。これからもずっと歌い継がれるであろう。

冬景色

大正2年に発表された作詞・作曲不詳の文部省唱歌である。唱歌は五七調の歌が多いが、この曲は初冬の朝の湖畔、昼の山畑、夕べの里をそれまでなかった六五調で詠っている美しい詞の歌である。

唱歌・童謡の名曲は3拍子が少ないと思われがちであるが、「朧月夜」、「海」、「故郷」など、愛唱されている唱歌に3拍子が多いのは意外のことであろう。それは、唱歌の編纂委員の中に、西洋音楽の研究に優れた才能豊かな専門家が存在していたからだと思われる。

たきび

昭和16年に作られた童謡である。この曲が歌われた当時は戦時中だったので、「落葉といえども大切な燃料であり、それで風呂ぐらいは焚ける」とか、「たき火は敵機空襲の攻撃目標になる」からと、軍部から圧力がかかり、真珠湾攻撃・太平洋戦争開戦の翌日、NHKの「幼児の時間」で放送された次の日に放送中止となった。戦後、昭和24年から再び歌われるようになったが、今度は消防庁から「街角でのたき火は困る」と文句がついたそうである。

「かきねのまがりかど」のモデルとなった垣根は、今も東京の中野区上高田に現存している。

6. おわりに

人間の感覚器官の発育は、6歳くらいまでにほぼ全てが完了するといわれている。多少幅をもたせても小学校低学年までで音感が決まってしまう。このことから、子どもたちの早期に「耳に音楽的な栄養」を提供することが大切なのである。

子どもたちの早期に与えなければならない音楽的な栄養とは、美しい音楽や楽しい音

楽を、その発達段階に応じて提供するということである。

音楽のメロディーは心をなごませてくれ、音楽のリズムは心を活性化してくれる。ほとんどの人は心地よい歌を歌うと心が安らぎ、うれしいとき、悲しいとき、寂しいとき、苦しいときなど、ふと歌う曲は私たちを力づけてくれる。

CMソングやアニメソングが子どもたちによく歌われるのは、CM・アニメそのものが子どもたちにとって楽しいということと、戦後に作られた新しい子どもの歌にも感じられる新鮮なリズム感やメロディー、そして斬新なハーモニーに魅力があるからである。しかし、残念ながら今は唱歌・童謡のように歌いやすく、ふと口にすることができ、みんなと楽しく歌える歌は少ない。

唱歌・童謡は親しみやすいメロディーで、日本の文化や伝統を描いた作品が多い。私たち大人は、唱歌・童謡の歌詞に込められた日本を愛する心を子どもたちに伝えることが必要である。

参考文献

- 浅香 淳(1983)『小学校音楽教育講座 第2巻 音楽教育の歴史』/(株)音楽之友社
大学音楽教育研究グループ(1991)『新版 音楽科教育』/(株)教育芸術社
林 洋子(1995)『シルバー・エイジ歌唱集』/(株)音楽之友社
読売新聞文化部(1999)『唱歌・童謡ものがたり』/(株)岩波書店
安田 寛 他2名(2000)『原典による近代唱歌集成-誕生・変遷-伝播』/ビクター(株)
澤崎 眞彦 他1名(2003)『なつかしの音楽教科書』/(株)ヤマハミュージックメディア
海沼 実(2003)『童謡 心に残る歌とその時代』/日本放送出版協会
若松 範彦(2004)『童謡・唱歌』/(株)西東社
(平成20年1月15日受付、平成20年2月15日受理)

